

## 「月食を撮る(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

皆既月食の当日(1月31日)の東京の天気予報は「晴れのち曇り」となっていた。しかしテレビの気象予報士は「雲はかかっても薄い雲」と説明していた。「薄い雲」とは上層雲を意味する。具体的には「巻雲」か「巻層雲」のどちらかだろう。



(2ページ目に拡大写真あり)

昼すぎに太陽を見ると、暈(うん)がかかっていた。これは太陽の手前に巻層雲(氷晶の雲)がある時に現れる「大気光学現象」の一種である。「日暈(にちうん)」が正しい名称だが「日の暈(ひのかさ)」とも呼ばれる。天気が悪化する兆しとなることが多い。



子どもたちと屋上に見に行った。日暈は非常に淡いので「遮光板」を使うと、何も見えない。しかし雲は

薄いので、肉眼での観察も難しい。やや雲が濃くなったタイミングで、光球(太陽本体)を樹木や手のひらで隠してすばやく観察させる。



よく見ると、暈の上部に淡い「環天頂アーク」も見られる。「暈」は月の周囲にも出現する。「月暈(げつうん)」または「月の暈」と呼ばれる。もし月食中に暈がかかったら、非常に美しい光景が見られるだろう。私は子どもたちにこう言った。

「今夜は快晴になるよりも、うす雲があったほうが、すばらしい月を見られます。スーパー・ムーンでブルー・ムーンでしかも、暈のかかった月食になるはずで。うすぐもりになるといいですね」

3年生の子どもたちに、前回の月食の記憶はない。生まれて初めての月食となる。まだ見ぬ月食に「暈」がかかる---子どもたちはワクワクしながら帰宅した。



19時過ぎ、校舎からも満月が昇ってくるのが見えた。やはり大きい。しかも雲がかかっている。期待大だ。

